国分町の歴史

本会幹事　　瀬川　幸人

１、地形と背景

現在の国分町付近は、長崎港の東岸にあたり、戦国期には親岳という小山に山城「水本（みのもと）城」があったと云われている。

寛永１８年（１６４１）外国船来航に備えるため、長崎港西岸に西泊番所が置かれた。翌１９年（１６４２）３月佐賀藩主鍋島勝茂は、参勤からの帰国に当たり、福岡藩に代わって長崎港の警備を命ぜられ、東岸に戸町番所を設置した。以後、福岡藩、佐賀藩が隔年で長崎港の警備を行い、元治元年（１８６４）７月に廃止されるまで約２３０年続いた。

同番所は当初常設の番屋ではなく、当番藩が４月の交代期に設営する仮の建物（小屋）であったが、慶安元年（１６４８）堅固な定小屋が造られた。

敷地は２８４０坪（約９４００㎡）、周囲１９０間（約３４５ｍ）、周囲を竹矢来で囲まれ、番頭、鉄砲頭、足軽などの木屋が１５軒、玉薬蔵３軒、道具小屋１軒などがあり、１貫７００目砲から３００匁砲まで合計１７挺の石火矢が備えられた。

上方には遠見番小屋、海岸には船着場が２か所あり有事の際には船で台場へ石火矢などを運ぶようにしていたと思われる。両番所には５００人ずつの計１０００人の番兵が居たので、千人番所とも云われた。

江戸期より彼杵郡戸町村は大村藩領であったが、安政４年（１８５７）大浦海岸一帯の居留地造成のため幕府直轄領となった。明治２２年（１８８９）市町村制による戸町村となり、明治３１年（１８９８）１０月には戸町村のうち大浦郷、浪ノ平郷、下郷が長崎市へ編入された。

下郷はさらに、大正２年（１９１３）に小菅町、国分町及び戸町１～３丁目の町名が付された。

２、国分町の由来

国分町之碑

町名の由来となっている國分顕蔵（嘉永２年（１８４９）～大正１２年（１９２３））は、対馬府中（厳原）藩士の家に生まれた。明治３年（１８７０）厳原藩庁へ出仕、明治１１年（１８７８）には長崎県庁へ異動となり銀屋町に住んだ。

戸町村村長の時に、余生の地として由緒ある、番所跡地を取得し、海岸近くに家を建てると銀屋町から転居した。

國分家邸内（国分町８番地）の「国分町之碑」には、「此の地は寛永十九年より約二百三十年の間、長崎港警備のために肥前鍋島藩の士卒五百余名が駐屯した番所の跡である。維新後番所跡の所有者はグラバー氏を経て三菱岩崎氏に移り林野と化しつつあった。対馬の藩士国分顕蔵氏明治十八年戸町村戸長を拝命、続いて村長として仝三十一年長崎市に編入されるまで大浦、戸町、小ヶ倉の村政を司る。その間、氏は由緒ある史蹟を護り一部を果樹園に拓かんと明治二十五年岩崎久弥氏より譲り受けて開墾、仝三十年長崎港湾第一期改良工事のため地域より土石が採掘されたのを機に一帯を住宅地として形成すべく推進したが、果樹園計画は翌年市編入当時五反歩余の柑橘園として実現していたものも今は概ね住宅地となった。以上、この地開祖としての國分氏の功績は世の認めるところとなり大正二年字南平及び小菅平の一部を併せ約八十戸をもって新しい町が形成されるに際し特に國分の姓を冠し国分町と命名され現在に至っている。昭和三十八年三月　長崎市長　田川　務」と書かれている。

３、町の主なあゆみと現況

昭和４０年ころの国分町（右下の矢印は４階建て水産研究所庁舎）
昭和５１年（１９７６）西海区水産研究所ニュース第２３号より

国分町には、昭和３７年（１９６２）から平成１５年（２００３）まで、東シナ海漁業資源研究などを行う国の研究機関「西海（せいかい）区水産研究所」が、平成１６年（２００４）から令和元年（２０１９）まで長崎県長崎港湾漁港事務所があり、町内唯一の公的機関であった。昭和５４年（１９７９）から令和３年（２０２１）まで押渕クリニック（院長は國分顕蔵の孫女）が地域医療に貢献した。平成１６年には町内経由のミニバス「うみかぜ」が運行し便利になった。

昭和３９年（１９６４）２３０戸、９８１人であった人口は、現在１３８戸、２６１人と減少し、高齢化も進んでいる。また、空き地や空き家があちこちに目立ち人通りもほとんどない状況である。

なお、昭和３８年（１９６３）には戸町番所跡（四、五、六、七番石標柱）が県史跡に指定されている。

本稿は令和７年７月の定例会での発表要旨である。

参考文献　国分慶英『国分町誌』自費出版１９６４年